



「学ぶ楽しさ」を実感すること(特別企画 行田稔彦教授退職記念)

著者	大西 公恵
雑誌名	和光大学現代人間学部紀要
巻	12
ページ	222-224
発行年	2019-03-08
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00004651/

「学ぶ楽しさ」を実感すること

大西公恵 *ONISHI Kimie*

和光大学現代人間学部心理教育学科では、2015年4月に子ども教育専修初等教育課程を新設し、小学校教員養成を開始しました。本課程では、幅広い分野に興味関心を持ち、学ぶことの楽しさを自ら実感している教師、カウンセリングマインドを有した共生社会形成の担い手としての教師を育成することを目標としています。そうした教師を育てるために、和光学園の小学校の教育活動に参加し、教員の仕事や子どもたちとのかかわりを実践的に学ぶ「学校インターンシップ」という講義を初年次導入科目として設置しました。そして小学校教員を目指して入学してきた学生に、教師の仕事の魅力や子どもと関わることの奥深さ、学ぶことの楽しさを伝えていただきたいと、行田先生を特任教授としてお迎えしました。

行田先生は東京都の小学校教員を経て、1983年に和光小学校に着任されました。同校で

10年にわたって学級担任を受け持たれ、1992年より和光鶴川小学校の主事、和光小学校・和光鶴川小学校の校長、和光幼小中高の学園代表をお務めになり、2013年に退職なさいました。その後、2015年より三年間、本学での教員養成に携わっていただきました。

先生は、本学に着任された4月の学園報に「子どもと真正面から向き合う『しんの教育』を学生とともに考えていきたい」とお書きになっています¹⁾。30年間にわたる和光学園の教育づくりで大切になさってこられたことを大学でも実践され、「人間教育を学び合う」場となるような小学校教員養成の土台を作ってくださいました。

先生は、これまでに算数と総合学習の授業づくりという2つのテーマで教育実践および教育研究に取り組んでこられました。

まず、算数の授業づくり²⁾では、「実感のある学び」を目指されました。「実感のある学び」とは、「羅列された知を覚えることなく、それを関連させ、生かし、発展させ、学ぶ主体である子どもの目標と結びつけた学び」、すなわち「知識に血を通わせること」だとおっしゃっています。そして、日常生活の中にある事実と「算数数学」をつないで、抽象化された「算数数学」の法則を具体的な場面の中で理解し、問題解決していく授業、「やらされる授業」ではなく「発見する授業」の中で「わかる実感」を獲得していく授業実践を行いました³⁾。こうした実践は、どの子ども「できたい・わかりたい」と願っているという、子どもへの信頼を土台としています。「なぜ」、「どうして」と考えることを通して自ら概念や法則の意味を発見していくこと、そして仲間とともに学びあうことを大切にした実践を行い、子どもに発見の喜び、学ぶ喜びを実感させ、さらに学びを促すことを目指してこられました⁴⁾。

一方で、総合学習では、本物志向の授業、深く感じるような学びを追求されました。和光の総合学習では、「平和」「環境」「食と健康」「いのちと性」など、答えが一つではない現代的な問題を扱い、「大人でさえ解決できない問題」について子どもたちが「深く感じ」、大人たちも今を生きる子どもたちとともに、現実を見つめ、共に「感じあって」学んでいくことを目指しています。このように「深く感じる」ことが、学ぶこと、わかることであると考え、そうした学びを実現するために、子どもたちに「素敵な文化や人との出会い」の機会を保障し、「交わる力」を豊かに育てることを大切になさってこられました⁵⁾。和光の小学校ではこうした総合学習の集大成として、沖縄学習を位置づけています⁶⁾。行田先生は、沖縄を学ぶ今日的意味として、①沖縄を学ぶと日本が見える（環境・歴史・いのち・平和・暮らしと文化を学ぶ）、②地域とつながり、地域から（足元の生活から）世界を読み解く学習ができる、③アジア太平洋地域における沖縄問題を考え、子どもたちが平和な未来社会の主人公に育っていく力につながる、という3点を挙げていらっしゃいます⁷⁾。

行田先生は、こうした小学校での教育実践をもとに、大学でも実践をなさいました。「算数の内容・構成」の授業では、学生たちは改めて小学生に戻った気持ちで学び直しをすることで、わかる楽しさを実感することができました。また、「学校インターンシップ」では、和光の小学校の授業や行事への参加、沖縄学習旅行への同行によって、自らが問いをもっ

て主体的に学ぶこと、多くの人との出会いを通して学ぶこと、学びを学習表現としてまとめ、伝え合うことの大切さを実感し、学びを深めていきました。

行田先生は、人間を育てる教育の原点は、「学ぶ喜び」と「教える喜び」のある学校づくりであり、子どもたちは「本物を重視した本質に迫る学び」と、その学びを広げ深める「学び合いの授業」を求めているとおっしゃっています。行田先生のご指導のもとでこのような学びを経験することができた学生たちが、卒業後に教師として出会った子どもたちに、そうした学びの機会を用意し、子どもとともに学んでいってくれることを期待したいと思います。先生がこのようにして学生を育ててくださったことに感謝しつつ、今後も「学ぶ楽しさ」を追求した実践を継承していきたいと考えています。

《注》

- 1) 『和光学園報』2015 春季号、No.351、2015 年 4 月、p.5
- 2) 『算数教室ふんせん記—子どものやる気を育てる自主教材による算数の授業』(民衆社、1984 年)、『なるほど算数』(大月書店、1988 年)、『学力を育てる—どの子もできたい、わかりたい』(旬報社、2002 年) ほか。
- 3) 『あしたも学校あるといいな—和光鶴川小学校の 10 年』大月書店、2002 年、pp.173-174
- 4) 前掲『学力を育てる』p.16, p.26
- 5) 前掲『あしたも学校あるといいな』pp.178-180
- 6) 『生と死・いのちの証言 沖縄戦』(新日本出版社、2008 年)、『わたしの沖縄戦』全 4 巻 (新日本出版社、2013-2014 年)、『いまこそ、沖縄』(新日本出版社、2014 年) ほか。
- 7) 『和光学園報』2012 年特別号、2012 年 11 月、p.4

————— [おおにし きみえ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授]